京都大学言語学研究 (*Kyoto University Linguistic Research*) **25** (2006), 217–255

否定文におけるフォーカス構造の実態
—日本語・ロシア語文の観察をもとに—

エブセーバ エレナ

1. はじめに

本小論では、発話の前提や主張の記述を行う立場から、日本語・ロシア語文の例を挙げフォーカス構造パターンを記述する中で、フォーカスおよび対比性と極性とのかかわりをめぐり考察を行う。その過程でとりあげられる問題の中には次のようなものが含まれている。

- 従来、述語にフォーカスがあるとして扱われることの多かったケースの中に２通りのパターンがあり、それらを区別する必要があることを主張する。
- 日本語とロシア語では、述語動詞が否定される構文（つまり、日本語では単純な動詞否定形「Ｖナイ」構文、ロシア語では「否定辞 ne Ｖ」構文）の「否定フォーカス」としては、文中の特定の要素を「否定フォーカス」にできない点で共通していることを指摘する。
- ‘否定のフォーカス’という用語をより明確に定義し、含意または推論を通していわば二次的に生じる意味的な否定を区別する必要があると主張する。

なお本小論を通じ、両言語の例（最初に日本語文例、その後、類義のロシア語文例）を並列して掲げながら議論を展開することが多いが、これは、音韻・形態・統語など種々の面で異なった特徴を多く有する両言語間で、フォーカス構造の構成についてどのような共通点（相違点）がみられるか対照するためである。

以下、2 節では、フォーカス構造を扱った先行分析のうち、発話の前提と主張を記述する構造意味論的な考え方にたち、肯定文例を挙げながら、（肯定）フォーカス、フォーカス領域の広さ、日本語とロシア語のフォーカス構造と語順についての概要、および、極性フォーカスと述語構成素フォーカスとの違い等について導入的な説明を行う。

3.1 節では、否定文において肯定フォーカス構造以外に、否定フォーカス構造の可能性がでてくる点を説明する。その上で 3.2 節では従来、「マ

ルチプル・チョイス（MC; Multiple-Choice）式」情報構造にもとづいて、例外的に文中の要素に‘否定のフォーカス’がおかれたものとして記述されることのあったケースについて、当該要素が対比トピックになっている場合の一種とみなし、そこから生まれる反転極性含意を記述するとらえ方について説明する。3.3 節ではどのような要素が‘否定のフォーカス’になりうるのか、両言語を対照しつつ検討する。さらに、3.4 節と 3.5 節では対比トピックであっても反転極性含意を生み出さない場合のある点、それがいかなるフォーカス構造の場合であるか等を整理する。4 節はまとめと今後の課題である。

2. （肯定）フォーカスと発話の前提・主張の構造的意味記述

フォーカスについては、数多くの研究が存在している。しかし、一見単純な概念であるように見えても、実際には何をフォーカスと呼ぶか、また何を基準にフォーカスを定義するかについては、先行研究の間で意見が一致していないことも多く、何を基準とするかによってフォーカスの定義と範囲も違ってくる。

ここでは、Lambrecht (1994:chap.5)や Krifka(2001)等を参考に、談話中で発話が発せられる際の情報構造に注目してフォーカスをとらえる立場のうち[1]、発話の前提と主張が何かに注目し、フォーカスを構造化された意味表示の中でとらえる構造意味論的な見方に立つことにする[2]。

---

[1] Lambrecht(1994:207ff.)は、いくつかの先行研究からフォーカスと関係した発言を引用した上で、発話中で「“新しい（new）”情報を担った部分」、あるいは、「話し手と聞き手の間で“共有されていない（unshared）”と話し手が想定している情報」をフォーカスとしてとらえる立場、つまり、発話が担う情報のうち、old な部分と new な部分、あるいは shared な部分と unshared な部分を区分していく”segmentation view”にもとづく考え方には問題があると論じている。

[2] 構造的意味（Structured Meaning）は次のように規定される。(von Stechow(1991))

(i) Structured meaning: For entity P and sequence $a_1,\ldots,a_n$,
the sequence $<\lambda x_1,\ldots,x_n Q(x_1,\ldots,x_n);\ a_1,\ldots,a_n>$ is a structured meaning
if its first member is a function which, when applied to $a_1,\ldots,a_n$, yields P.

構造意味論的枠組みの中でフォーカス構造をとらえる例としては、Krifka(2001)がある。Krifka(2001)は(i)のような構造的意味のとらえ方をフォーカス構造が問題となる発話の分析に適用し、フォーカス構造を質問-応答ペアの適合性に関連づけて記述しようとしている。以下の例を参照。($[\,]_F$はフォーカス領域を、スモールキャピタルはプロソディー上卓立する語を示している)。

例えば、次の(1A)「私はこの時計をパリで買いました」の「フォーカス」が「パリ（で)」にあることは、発話の前提集合（この場合「話し手がその時計を買ったことが問題となりうる場所の集合」）を Jackendoff(1972) にならったλ表示を用いてあらわし、その前提集合の中にフォーカス要素「パリ」が含まれる（λx/場所(<話し手>ガ コノ時計ヲ x デ 買ッタ) ∋ パリ）[3]といった形式の中で関係的に記述される。

1. Q: 君はその時計をどこで買ったの？
   A: 私はこの時計をパリで買いました。

1'. Q: Gde ty kupil eti chasy?
   where you bought this watch
   A: Ja kupil eti chasy v Parizhe.
   I bought this watch in Paris

(ii) Krifka(2001)が挙げる適合的 Q-A ペアの例　各発話の構造的意味の簡易表示：
Q: Who did Mary see?　　<λx[SEE(x)(M)], PERSON>
A: Mary saw [JOHN]F.　　<λx[SEE(x)(M)], J>, where J∈PERSON

(M, J は個体メアリとジョンをさしており、PERSON は"who"という疑問詞の選択により、ラムダ抽象された変数 x が満たすべき制限として「人間である」というものがあることを表している)

Krifka(2001)は、上の(ii)の"Mary saw JOHN."という文が、"Who did Mary see?"という質問に対する応答として解釈された場合に適合的(congruent)である点を、質問-応答ペアの適合性に関する(iii)の条件を満たしていることから説明している。

(iii) 質問-応答ペア(Q-A ペア)が適合的であるための規準(Krifka 2001)
[[Q]]=<B, R> and [[A]]=<B', F>とすると、B=B' and F∈R でなければならない

(iii)においては、質問文の意味[[Q]]と応答文の意味[[A]]はそれぞれ、その焦点が変数として抽象されたλ関数としてとらえられる背景（background）部（それぞれ B、B'）と、その関数に適用されることにより発話全体の意味が計算される制限(R(restriction))／焦点(F(focus))部との組み合わせにより構造的に表現されている。なお、Q-A が適合的なペアを構成するには、B=B'と F∈R の両方の条件が満たされねばならないことが規定されている。
(ii)の例では、[[Q]]も[[A]]も共通した背景として λx[SEE(x)(M)] を持っており（つまり B=B'）、また J∈PERSON であることから F∈R も満たされており、適合的 Q-A ペアを構成していると考えられる。
一方、"Who did Mary see?"という質問に、"[MARY] F saw John."や"Mary saw [Die Kinder der FINSTERNIS] F."と応答するのは、それぞれ(iii)中の B=B'、F∈R という条件に違反しているため、適合的な Q-A ペアを構成できていないという。
[3] 本小論では変数(x)に関するタイプ(TYPE)および制限(RESTRICTION)を表現する場合、x/TYPE:RESTRICTION のような記法で簡易表示することにする。TYPE と RESTRICTION は随時表示される（例えば 1'の下の表示では変数のタイプ表示のみで制限は表示されていない)。

前提: λx/場所(<話し手>ガ コノ時計ヲ x デ 買ッタ) is under discussion
主張: λx/場所(<話し手>ガ コノ時計ヲ x デ 買ッタ) ∋ パリ

Jackendoff(1972)で使われているこうしたλ記法は形式意味論でよく使われる、λ抽象により関数をあらわす使い方とはずれるところがあるが、λ表示により前提集合をあらわしていると理解すれば直感的に分かりやすいこともあり本小論ではこれを採用する。

2.1. フォーカス領域の広さ

Lambrecht(1994)はその範囲の広さの違いにより、フォーカス構造を、文フォーカス (sentence-focus)、述部フォーカス (predicate-focus)、構成素フォーカス (argument-focus) の 3 類に下位区分している。具体例を挙げると例えば、同じ"My car broke down."という文であっても、異なった文脈で発話されれば、異なった前提と主張をもつ異なったフォーカス構造を有する文となり、それぞれに応じた音声的実現が行われるという[4] (Lambrecht 1994:221-238)。

2. 文フォーカス構造
(What happened? に対する応答として)

Sentence:	My CAR broke down.
Presupposition:	–
Assertion:	"speaker's car broke down"
Focus:	"speaker's car broke down"
Focus domain:	S

3. 述部フォーカス構造
(What happened to your car? に対する応答として)

Sentence:	My car broke DOWN.

[4] 以下に引用した表示は、3種のフォーカス構造の違いを示すのに関係した情報の一部のみを表したもので、実際には例えば(4)では、(i)話し手が車を所有している、(ii) NPの指示物は同定可能である、(iii) 話し手はトピックである、(iv) 話し手と話し手が所有する車は聞き手の心の中でアクティブである、といった種々の前提が他にもあると考えられるという。また(2)(3)(4)でスモールキャピタル表示の語はピッチプロミネンスによって特徴づけられる main sentence accent が置かれるとされていた部分である。本小論では随時、同じ趣旨でスモールキャピタル表示を用いている。ただしスモールキャピタル表示が行われていない文は、ピッチプロミネンス位置の表示を特に行っていないだけで、プロミネンスがどの位置にもあらわれないことを意味しているわけではない。

Presupposition: "speaker's car is a topic for comment x"
Assertion: "x = broke down"
Focus: "broke down"
Focus domain: VP

4. 構成素フォーカス構造
(I heard your motorcycle broke down. に対する応答として)
Sentence: My CAR broke down.
Presupposition: "speaker's x broke down"
Assertion: "x = car"
Focus: "car"
Focus domain: NP

本小論では基本的に構成素フォーカスを中心に議論を進める。

構成素フォーカス構造の発話は、通常存在前提を伴う。例えば、以下の例は通常、話し手が買った何かが存在すること（∃x/もの(<話し手>ガ x ヲ 買ッタ)）を前提としている。本小論ではこうした存在の前提については、話し手が買ったかどうかが問題になっているものの前提集合（λx/もの(<話し手>ガ x ヲ 買ッタ)）が議論されている（ is under discussion）という形で記述する[5]。

5. Q: 君は<u>何</u>を買いましたか。
A: <u>ケーキ</u>を買いました。

5'. Q: <u>Chto</u> ty kupil?
what you bought
A: Ja kupil <u>tort</u>.
I bought cake

前提：λx/もの(<話し手>ガ x ヲ 買ッタ) is under discussion
主張：λx/もの(<話し手>ガ x ヲ 買った) ∋[6]ケーキ

[5] NOBODY likes Bill. のように、問題となっている対象の集合が空である場合もあるため、やはり存在量化子による前提を考えるのは強すぎることから、本小論ではただλx(話し手が x を 買った) is under discussion といった前提記述を行うことにとどめている。しかしながら、(5)のような質問が発せられる場合、やはり∃x(話し手が x を 買った)のような存在前提はあり、ただそれが、後に「いや、私は何も買ってないよ」といった発話により取り消されることがあるだけだと考え、存在量化子を用いた前提の記述を行う立場もありえる。

[6] このような答えでは、通常 Grice の量の公理から、総記の意味が会話上含まれる。そのような意味は、λx(話し手が x を 買った) = {ケーキ} と書けようが、ここではあ

2.2. 日本語とロシア語におけるフォーカス構造

2.2.1. 共通点

日本語、ロシア語とも、フォーカス要素をマークする方法としては、(i) 疑問詞のような語彙的フォーカス要素を用いる方法以外に、(ii) 非フォーカス要素の省略や、(iii) プロソディー上フォーカス要素を卓立させるやり方がある（Kuno 1987 や高見 1995 等の機能的構文法研究を参照）。

例えば、以下の(6)のような質問文では、(i)により「何（を）」／chto がフォーカス要素であること、それに対する答えでは、(ii)により「カレー」／karri がフォーカス要素であることが明示的に示されている[7]。

6. Q: 君は夕べ<u>何</u>を作って食べたの？
   A: <u>カレー</u>です。

6'. Q: <u>Chto</u> ty prigotovil i sjel vchera vecherom?
   what you cooked and ate yesterday evening
   A: <u>Karri</u>.
   curry

また(7)、(8)で示したように、語順は同じであっても（「私は夕べカレーを作って食べました」／Vchera vecherom ja prigotovil i sjel karri.）、どのような質問の答えとして用いられるかによって、文中のどの要素にプロソディー上の卓立（プロミネンス）が置かれるかに違いが見られる。それぞれのやりとりの中でフォーカス要素である「カレー」／karri および「夕べ」／vchera vecherom という表現にプロミネンスを置いて答えが行われるのが、自然な発音である。すなわち両言語ともに文中の語順を変えずに、適切なプロミネンスの付与によってフォーカス要素を示すことが可能である（方法(iii)）。

7. Q: 君は夕べ<u>何</u>を作って食べたの？
   A: 私は夕べ<u>**カレー**</u>を作って食べました。

くまでそれは(5)に記述したような主張に、会話の含意が加わった結果だと考え、主張については(5)のようなものを記述しておく。

[7] 以下の例は久野（1983：125）の例をアレンジしたものである。また久野(1983)に従いフォーカス要素を下線あるいは太字により表示する記法を用いることが本小論でもある。

7'. Q: Chto ty prigotovil i sjel vchera vecherom?
what you cooked and ate yesterday evening
A: Vchera vecherom ja prigotovil i sjel KARRI.
yesterday evening I cooked and ate curry
8. Q: 君はいつカレー作って食べたの？
A: 私は**タベ**カレーを作って食べました。
8'. Q: Kogda ty prigotovil i sjel karri?
when you cooked and ate curry
A: VCHERA VECHEROM ja prigotovil i sjel karri.
yesterday evening I cooked and ate curry

このように適切な音調の付与により、同一語順の文中の種々の要素がフォーカスになり得るという特徴を日本語、ロシア語ともに持っているのである。

なおロシア語に関しては、先行研究においてもフォーカス構造の柔軟性について指摘がなされている。例えば、Van Valin(1999)は、フォーカス構造と統語法に関する類型論的分類として、i) 語順の厳格性 v.s.柔軟性と、ii) フォーカス構造の厳格性 v.s.柔軟性とを交差させる形で、４つの言語タイプを設けている[8]が、その分類によれば、ロシア語は「柔軟な統語構造・柔軟なフォーカス構造」のタイプに属しているという。

ただし同時に、フォーカス構造と語順のかかわりについては、完全に自由とはいえないという指摘もなされている。Van Valin(1999)はComrie(1979, 1984)をひき、以下のような傾向に言及している。

9. (a) 平叙文：原則、topic-focus の語順
(b) WH-疑問文：WH 要素は原則 clause-initial position に生じる

それにもかかわらずロシア語をやはり柔軟なフォーカス構造の言語に分類する根拠として、Van Valin(1999)は次のような文フォーカス構造の例

[8] 統語構造の厳格性 v.s.柔軟性は「語順の自由さ」を基準に定義されている。一方、フォーカス構造の厳格性 v.s.柔軟性は、potential focus domain（フォーカスに可能性としてなり得るような要素を含んでいる領域）に対する制限を基準に定義されている（Van Valin 1999)。

柔軟なフォーカス構造: 単文における potential focus domain が主節全体である場合
厳格なフォーカス構造: potential focus domain が主節の一部だけに限られている場合

における語順の自由さを挙げている。

10. Q: Chto sluchiloc'?
    what happened?
    A: (a) Mashina slomalas'.
    car broke_down
    '[My] car broke down.'
    (b) Slomalas' mashina.
    broke_down car
    '[My] car broke down.'

ロシア語では、上のような例では主語のＮＰが動詞の後の位置にも前の位置にも生じうる。この点は、イタリア語、フランス語などとは根本的に違っており、ロシア語のフォーカス構造は他の言語と比べてやはりどちらかと言えば柔軟であると認めざるを得ないと Van Valin(1999)はいうのである。

2.2.2. 相違点

日本語では 2.2.1 で言及したやり方とは別に、フォーカス要素をマークする方法として、いわゆる分裂文（cleft sentence）が存在している。例えば、(11)のような分裂文は、「夕ベカレーを作って食べたのは誰か」が問題になっているような場面で、「太郎」をフォーカスにした表現として適切に使用可能である。

11. Q: （夕ベカレーを作って食べたのは誰ですか。）
    A: 夕ベカレーを作って食べたのは太郎です。

なお、日本語の文中においてどの位置がデフォルトのフォーカス位置かについて、久野(1978:60)は次のような言い方で、動詞が文のフォーカスではない場合、動詞の直前の要素にフォーカスがあると述べている。

12. **日本語は、通例、動詞の位置が文末に固定されているので、動詞が旧情報を表す場合は、その直前の位置が文中の最も新しい情報（＝焦点）を表わす要素のための予約席となる。**

このような記述により、特別のイントネーションで発音されるのでない場合（つまり、「プロソディーによるフォーカスのマーキング」が行われるのでない場合）、次の(13a)と(13b)の質問は通常、それぞれ「カレー（を）」と「夕べ」をフォーカスにした文だと考えられることが説明されるわけである。

13. (a) 太郎は夕べカレーを作ったの？
    (b) 太郎はカレーを夕べ作ったの？

一方、ロシア語のフォーカス構造の特徴としては次のようなものが挙げられる[9]。

まず、フォーカス要素のデフォルトの位置は文末である。

14. **平叙文において、述語動詞が旧情報を表す場合、プロソディーによって他の要素がフォーカスとしてマーキングされるのでなければ、文末に来る要素はフォーカス要素として解釈される。**

15. Ivan kupil kompjuter <u>u menja</u>.
    Ivan bought computer from me
    ～イワンがコンピューターを買ったのは私からだ。

一方、疑問文におけるデフォルトのフォーカス位置に関しては以下のようにまとめられる。

16. **疑問文におけるデフォルトのフォーカス位置は次の通りである：**
    a. WH-疑問文では（フォーカスは WH 要素である）: clause-initial position (＝(9b)) (Cf.: (17))
    b. Yes-No 疑問文では：トピック要素の直後 (Cf.: (18))

17. <u>Kogda</u> ty kupil kompjuter?
    when you bought the_computer

[9] ここではあくまで概要の記述にとどめている。実際にはフォーカス要素の位置が決定される際に、さまざまな要因が複雑に絡み合っている。フォーカス構造と語順とのかかわりについてはより緻密な議論が必要であるため、今後の研究の課題とする。

～あなたはいつコンピューターを買ったの?

18. Ty v etom godu kupil kompjuter?
you in this year bought the_computer
～あなたはコンピューターを今年買ったの?

また、焦点化の構文的手段の一つとして分裂文が考えられるが、ロシア語には厳密な意味で分裂文に相当するものは存在していない[10]。

まとめると、両言語の間では、基本語順やデフォルトのフォーカス位置、分裂文のあり方などの違いが見られる。しかし、語順を変えずにプロミネンスだけでフォーカス位置をマークできる点、つまり、フォーカス位置が厳格に文中の特定の位置に固定されているわけでない点など、フォーカス構造が比較的自由であるという特徴について、日本語とロシア語は共通していると言える。

2.3. 極性フォーカスと述語構成素フォーカス

ここで、従来「述語（動詞)」がフォーカスになっているとされることのあったケースについて、a) 当該述語（動詞）を含む文に対応する命題の極性がフォーカスになっていると考えるべき場合と、b) 述語（動詞）

---

10 形の上で分裂文に類似しているものとしては、以下の例に見られるような eto（指示詞に由来）という語から始まる構文がある。

(i) Eto on kupil mashinu.
It he bought the_car
～車を買ったのは彼だ。
(ii) Eto ei on ob etom skazal.
It to_her he about this told
～彼がそれを言ったのは彼女にだ。

しかしこの構文では、英語などにみられるように、統語上主節と関係節とに分かれているわけではない(以下の例を参照)。

(iii) *Eto ja kto skazal emu ob etom.
It I who told to_him about it
Cf.:
(iv) It was me who told him about it.

また、この構文においてフォーカス要素になりうるのは基本的に主語(i)か目的語(ii)だけである。これらの点から、この構文を分裂文とみなすことは難しいといえる。(ただし、eto が前置された要素が必ずフォーカスとして解釈される点は分裂文と共通している。)

自体が構成素フォーカスになっていると考えるべき場合を区別して記述する提案を行っておきたい。

例えば、次の(19)の文が発話される文脈としては、(20)と(21)の２通りが考えられる。

19. イワンは太郎に本をあげました。
20. Q: イワンは太郎に本を売りましたか？
    A: (a) イワンは太郎に本を[あげました]$_F$ ((b) が売ったのではありません)。
21. Q: イワンは太郎に（もう）本をあげましたか？
    A: はい（イワンは太郎に本をあげました)。
19'. Ivan podaril Taro knigu.
    Ivan presented Taro a_book
20'. Q: Ivan prodal Taro knigu?
    Ivan sold to_Taro a_book
    A: (a) Ivan [PODARIL]$_F$ knigu Taro(, (b) a NE prodal).
    Ivan presented a_book to_Taro but not sold
21'. Q: Ivan (uzhe) podaril Taro knigu?
    Ivan already presented to_Taro a_book
    A: Da (, Ivan podaril Taro knigu).
    yes Ivan presented to_Taro a_book

文脈の違う(20A)と(21A)の例では、(19)に対応する文において何がフォーカスになっているかに関して違いがあるものと思われる。(20Aa)の応答文は、述語（動詞）要素（あげました／podaril）そのものが（対比的）フォーカスになっているケースと考えられる。そして、述語（動詞）以外の構成素がフォーカスになっている場合同様に、文中のフォーカス要素をλ抽象して意味を表現すると、次のように表示される（前提集合は「イワンが太郎に本をｘしたことが問題になっていること」の集合、主張はそのような集合の中に「あげる」が含まれることである)。

20''. A. (a)前提：λx(イワンガ 太郎ニ 本ヲ x シタ) is under discussion
    A. (a) 主張：λx(イワンガ 太郎ニ 本ヲ x シタ) ∋ アゲル
    (「あげる／podarit'」がフォーカス)

一方、(21A) においてフォーカスになっているのは「本をあげました／podaril knigu」に当たる述語を含んで作られた命題相当の式[11]がもつ極性と考えるのが適当であると思われる。

(21) のような例では、応答として「はい／Da」または「いいえ／Net」のみで答えることが可能である（つまり、旧情報である「イワンは太郎に本をあげました。／Ivan podaril Taro knigu.」全体を省略することが可能である)。あるいは、「イワンは太郎に本をあげました。／Ivan podaril Taro knigu.」や「イワンは太郎に本をあげませんでした。／Ivan ne podaril Taro knigu.」といった文中で、極性を表す働きを担っているのは述語動詞（と否定辞との組み合わせ）部分であるので、「はい、あげました。／Da, podaril.」や「いいえ、あげませんでした。／Net, ne podaril.」といった答え方をすることも可能である。

(21A) のようなケースは「述語（動詞)」にフォーカスがある場合として扱われることも多かった[12]。しかし、前段落で述べたような振る舞いを鑑みるに、先の「述語構成素フォーカス」のケースと区別する必要があると考えられるため、本小論では(21A)のケースを「極性フォーカス」を有する場合として別に扱う。

なお (21A) のようなタイプの発話について、本小論で用いているような表記法でフォーカス構造を表すため、命題相当の式 ϕ から極性(1 か 0 かのどちらか)を抽象するような操作（仮に？ϕ と略記する）を考え、極性自体をフォーカスにした次のような表示により関係的記述を行う。

21". A. 前提:？(イワンガ 太郎ニ 本ヲ アゲタ) is under discussion
A. 主張:？(イワンガ 太郎ニ 本ヲ アゲタ) $\ni$ 1[13]

以上、従来述語要素がフォーカスになっていると言われてきたケースについて、述語構成素フォーカスの場合と極性フォーカスの場合とを分けるという本小論の立場について説明した。

---

11 時制の意味の取り扱いの詳細にはここでは立ち入らない。
12 例えば久野(1983)がそのような先行研究の一例である。
13 極性は{1,0}のような 2 値からなる集合で、命題に相当する式が真であれば 1、偽であれば 0 が含まれると考えている。

3. 「否定フォーカス」と対比による反転極性含意の意味記述

3.1. 否定文における「否定フォーカス」と「肯定フォーカス」

否定文におけるフォーカスのあり方は、大きく「肯定フォーカス」と「否定フォーカス」の二つに分けられる。これまでに挙げてきたフォーカス構造の記述は、極性フォーカスの例も含めて、

前提：{前提集合} is under discussion
主張：{前提集合} ∋ フォーカス要素

のような形式で行われ、いずれも主張として、前提集合へのフォーカス要素の帰属を主張する、「肯定フォーカス」の例ばかりであった。例えば、

22. (= (1), (1'))
Q:君はその時計をどこで買ったの？／Gde ty kupil eti chasy?
A:私はこの時計をパリで買いました。／Ja kupil eti chasy v Parizhe.

における応答文のフォーカス構造中の主張

22". A. 主張：λx/場所(<話し手>ガ コノ時計ヲ xデ 買ッタ) ∋ パリ

もその一例である。

それに対して、否定文の場合には「肯定フォーカス」だけでなく「否定フォーカス」というものも考えなければならない。以下に具体例を挙げてみてゆこう。

否定文の関係したフォーカス構造であっても、必ずしも「否定フォーカス」になるとは限らない。例えば、(23)、(23')の例

23. Q. 君はおみやげをどこで買わなかったの？
A. 私はおみやげをパリで買いませんでした。
23'. Q. Gde ty ne kupil suvenir?
where you not bought souvenir
A. Ja ne kupil suvenir v Parizhe.
I not bought souvenir in Paris

における応答文のフォーカス構造中の主張

23". A. 主張: λ x/場所 ¬(<話し手>ガ コノ時計ヲ xデ 買ッタ) ∋ パリ

も、前提集合の記述で否定が関係するものの、主張はやはり「{前提集合} ∋フォーカス要素」という形で行われているため、「肯定フォーカス」の例である。以下の例も同様である。

24. Q: 誰がきのう学校へ来なかったの？
A: イワンが来ませんでした。
24'. Q: Kto vchera ne prishel v shkolu?
who yesterday not came to school
A: Ivan ne prishel.
Ivan not came
24" A: 前提: λ x/ひと ¬(x ガ キノウ 学校へ 来タ) is under discussion
主張: λ x/ひと ¬(x ガ キノウ 学校へ 来タ) ∋ イワン

要するに、否定辞を含んだ文であっても、意味的には（前提に否定を含んでいるだけで）主張自体が否定的でない場合は、フォーカス構造としては肯定文の場合と同じく「肯定フォーカス」の文としてとらえられる。

一方で、否定文が「否定フォーカス」を持つ場合もある。「否定フォーカス」[14]とは、主張が

{前提集合} ∌ フォーカス要素

という形式で行われる場合を指す[15]。以下の例を参照されたい。

25. Q: 君はその時計をどこで買ったの？ パリで？
A1: 私はこの時計をパリで買ったのではありません。

---

14 なお、本小論を通じて、「否定フォーカス」をここで説明した「肯定フォーカス」と対比させた意味で使う一方、文中のどの要素がこうした「否定フォーカス」を担っているかを示したい場合に‘否定のフォーカス’という用語と記法も使用する。

15 否定文に関しここで「肯定フォーカス」と「否定フォーカス」と呼ぶ区別は、否定辞がそれぞれ、構造的記述の前提か主張かのいずれの部分の記述に関係するかということから、Kato(1985)で Neg-P(resupposition)読み、Neg-A(ssertion)読みと呼ばれていた区別にほぼ対応している。

A2: 私がこの時計を買ったのはパリ（で）ではありません。

25'. Q: Gde ty kupil eti chasy? V Parizhe?
where you bought this watch in Paris
A. Ja kupil eti chasy ne v Parizhe.
I bought this watch not in Paris

の応答文の主張は

2". A: 主張: λx/場所(<話し手>ガ コノ時計ヲ x デ 買ッタ) ∋ パリ

のような形で表現される。これは「否定フォーカス」を有する発話の例である。次の Kato(1985)からの例も「否定フォーカス」が含まれている[16]。

26. 否定フォーカス解釈の例[17]（～ノデハナイ構文による例）
A. 誰が神戸に行ったの？
B. 太郎が神戸に行った。
C. （いや、）太郎が行ったのではない。（次郎が行ったのだ。）
C. 前提[18]: λx/ひと(x ガ 神戸ニ 行ッタ) is under discussion
C. 主張: λx/ひと(x ガ 神戸ニ 行ッタ) ∋ 太郎

以上、否定辞が関係した構文に２種が存在し、そのうち主張で集合への要素の帰属を否定する構文だけを本小論では「否定フォーカス」の構文としてとらえるという説明を行った。

3.2. 構成素の「否定フォーカス」の表し方

本節では日本語とロシア語で文中の特定の要素を‘否定のフォーカス’にするために使われる手段の概要を述べる。まずはじめに次のようにいうことができる。文中の構成素が‘否定のフォーカス’となる場合、それぞ

[16] 発話の前提と主張の記述は本小論での表記法にあらためている。また日本語の例文の引用に際し、もとのローマ字表記やカタカナ表記を適宜、漢字やひらがな表記にあらためることがある。以下も同様。
[17] 久野(1970)の中で用いられた例をもとにアレンジされたものである。
[18] 本来なら談話の流れの中で(26B)の発話により「λx/ひと(x ガ 神戸ニ 行ッタ) ∋ 太郎」という点まで(26C)の発話の時点では談話関与者により共有された前提となっていてよいはずであるが、(26B)の発言は間違った事実認識に基づく(26A)に対する応答だと(26C)は考え、“訂正”を行っている“メタ否定”の例ともいえる発話が(26C)である。

れの言語では次のような手段が用いられる。

(a) ロシア語：否定辞の ne を当該の要素の直前に置く（この際否定フォーカス要素だけが残され、それ以外の要素が省略されることが多い）。

(b) 日本語：(1)否定フォーカス要素を構文的に明示できる分裂文[19]を用いる（否定フォーカス以外の要素は省略されることが多い）、あるいは、(2)～ノデハナイ（その話し言葉的バリエーション（～ンジャナイ等）を含む）、～ワケデハナイ構文[20]を用いる。

これらの方法が用いられている具体例として、以下の例をみてみよう。

27. Q: 太郎は誰に電話をしたの？ イワンに電話をしたの？
A1: （いいえ。）太郎がイワンに電話をしたのではない。
A2: （いいえ。）太郎が電話をしたのはイワン（に）ではない。
A3: （いいえ。）イワンではない。

27'. Q: Komu Taro zvonil? Ivanu (zvonil)?
whom Taro called to_Ivan called
A1: (Net.) Taro zvonil ne Ivanu.
no Taro called not to_Ivan
A2: (Net.) Ne Ivanu.
no not to_Ivan

27". 前提: λx /ひと(太郎ガ x ニ 電話ヲシタ) is under discussion
主張: λx/ひと(太郎ガ x ニ 電話ヲシタ) ∋ イワン

なお、日本語の～ノデハナイ、～ワケデハナイ構文においては、どの要素がフォーカスになっているかが、基本的に曖昧である。例えば、以下の(28)の例では（イントネーションを考慮しなければ）いくつもの解釈が可能である((a)~(d))[21]。

19 ［･･･否定フォーカス要素＋コピュラ＋ハ＋否定辞］という形で形成される。
20 ［･･･名詞化辞「ノ」＋コピュラ＋ハ＋否定辞］という形で形成される。
21 この点について、例えば、Takubo(2005)では以下のように説明されている：Takubo(2005)では、「太郎がりんごを食べるのではない」という「～ノデハナイ」否定文を例に挙げ、日本語の否定の焦点（本小論ではフォーカスという用語を用いる）について説明を行っている箇所がある。（他に、「私の本ではない」という表現では通常、「私（の）」という部分が否定のフォーカスになり「本（だ）」という部分は前提になっている、という例も挙げられている。）

28. 私が市場で車を買ったのではない。
    a. 私が車を買ったのは市場ではない。
    b. 私が市場で買ったのは車ではない。
    c. 市場で車を買ったのは私ではない。
    d. 私が市場で車にしたのは買うことではない。(「売った」など)

一方、ロシア語には日本語の「～ノデハナイ」構文に対応するような構文がなく、上述の通り、ある要素が‘否定のフォーカス’にあたることはほとんどの場合、その要素の直前に否定辞の ne が置かれることによって明示的に示されるのである((25')や(27')を参照。また、日本語の(28a)には、Ja kupil mashinu <u>ne na rynke</u>.のような例が対応する)例外は述語動詞が‘否定のフォーカス’になる場合と述語の‘極性’がフォーカスになる場合の区別であるが、この点については後で説明する。

以上のことから、日本語とロシア語では、構成素の‘否定のフォーカス’を表す具体的手段が大きく異なることが分かった。

3.3. 述語動詞の否定形と「否定フォーカス」、両言語間の共通点

日本語とロシア語では述語動詞が否定されるような構文(つまり、日本語では単純な動詞否定形「V-ナイ」構文、ロシア語では「否定辞 ne　V」

(i) 太郎がりんごを食べるのではない

文の意味をイベント論理を用い一項述語の連言としてあらわすなら、「太郎がりんごを食べる」の意味はおおよそ、[Agent(e)＝taroo ∧ Patient(e)＝ringo ∧ e＝taberu]のように表現することができ、その否定(¬[Agent(e)＝taroo ∧ Patient(e)＝ringo ∧ e＝taberu])をドモルガンの法則により変形した選言式([Agent(e)≠taroo ∨ Patient(e)≠ringo ∨ e≠taberu])をもとに、そのいずれか一つが否定のフォーカスになった解釈は、(ii(a))、(ii(b))、(ii(c))のように表現できるというのである(それぞれ、「りんご(を)」「太郎(が)」「食べる」という部分が否定のフォーカスとなった解釈に対応する)。

(ii) a. ∃e[Agent(e)＝taroo ∧ Patient(e)≠ringo ∧ e＝taberu]
(太郎が食べるのはりんごではない)
b. ∃e[Agent(e)≠taroo ∧ Patient(e)＝ringo ∧ e＝taberu]
(りんごを食べるのは太郎ではない)
c. ∃e[Agent(e)＝taroo ∧ Patient(e)＝ringo ∧ e≠taberu]
(太郎がりんごにするのは食べることではない)

(i)が発話される場合、否定のフォーカスとなる要素にフォーカスアクセントが置かれるのが通常であるが、そのようなフォーカスアクセントがなければ、(i)は(ii)の3つの解釈で曖昧になるのである(Takubo 2005)。

構文)、の「否定フォーカス」としては、基本的に極性否定[22]の可能性しかなく、文中の特定の要素を‘否定のフォーカス’にできない点で共通していると考えられる。

日本語に関してはこの特徴について久野(1983)や Takubo(1985)等によって指摘がなされている。ここでまず、Takubo(1985)が、日本語や英語の文中でどのような要素が否定のフォーカスになりうるか[23]を対照し議論する中で掲げていた、次の例文をみてみよう[24]。

29. (a) *私ハ 1920 年に生まれなかった。
    (b) 私は 1920 年に生まれたのではない。
    (c) I was not born in 1920.
    (d) It was not in 1920 that I was born.

上の例で‘否定のフォーカス’となるべき要素は「1920 年に」／in 1920 という生年に関する句である[25]と考えられるが、(c)の文法性からも分かるように、英語ではこうした解釈が述語を否定することによっても得られるのに対して、日本語では述語否定によっては得られず((a)を参照)、「1920 年に」をフォーカスにするためには「～ノデハナイ」構文などを使う必要がある(前節参照)。

同様に、久野(1983)は次のような例を挙げ、否定辞のナイの直前の述語要素のみが否定のフォーカスになり得るという[26](久野(同上)はこの制限の例外として、いわゆる「マルチプル・チョイス式」焦点を挙げているが、これについては後ほど言及する)。これによって、以下の例の間に見

[22] 次節で説明する、対比トピックの使用により反転極性含意を伴う場合も含める。なおロシア語における述語構成素フォーカスの可能性については後述する。
[23] 両氏とも否定と平行して疑問のフォーカスについても論じているが、本小論では省略。
[24] (29)は、久野(1983)の中で用いられた例からアレンジされたものである。
[25] つまり、本小論で採用した表記で記述した場合、次のような解釈に対応する:

前提: λx/西暦(<話し手>ガ x 年ニ 生マレタ) is under discussion
主張: λx/西暦(<話し手>ガ x 年ニ 生マレタ) ≠ 1920

[26] なお、Takubo(1985)はこうした日本語と英語の振舞いの違いを、統語構造の違いにより説明しているが(両言語における“否定のスコープ”の違いは統語構造上の c-command 領域の違いを元に説明される; Takubo 1985:96)、ここでは否定辞の統語的スコープの広さと否定文におけるフォーカスの出方の連動の問題については意見を保留したい。

られる認容度の違いが説明されるわけである。

30. Q: 君は、**終戦の年に**生まれたのか。
A: ??いや、終戦の年には、生まれなかった。
31. Q: 君は、終戦の年にはもう**生まれて**いたのか。
A: いや、終戦の年にはまだ生まれていなかった。
32. Q: 君は、この写真を**パリで**撮ったのか。
A: * いや、パリで（は）撮らなかった。
33. Q: 君は、パリで写真を**撮った**のか。
A: いや、パリでは写真を撮らなかった。

久野(1983)によれば、(30)、(32)のような、動詞以外の要素が‘否定のフォーカス’になっていると思われるような文では、述語が否定されても適切な解釈が得られず、非文法的になるわけだが、(31)、(33)のように、動詞自体が否定されるような解釈では、自然な文であるという。

本小論ではこれらのデータに関する両氏の観察を妥当なものとみなす。ただし、上の(31)、(33)のような文において、動詞自体が‘否定のフォーカス’になっているという言い方は、本小論の用語法に照らして適当でない。これらの例は 2.3 節で説明した「極性フォーカス」の例に当たると考えられる。

つまり、(31)の「終戦の年にはまだ生まれていなかった」や(33)の「パリでは撮らなかった」は、久野(1983)ではナイに先行する動詞部分が否定のフォーカスになっているケースであるとして説明されているが、本小論では、既述の通り、極性が否定フォーカスになっているケースとして扱う。本小論の記法でフォーカス構造を記述すると、それぞれ次のようになる。

31'. 終戦の年にはまだ生まれていなかった。（極性が‘否定のフォーカス’）
前提: ？（<話し手>ガ 終戦ノ年ニ 生マレテイタ）**is under discussion**
主張: ？（<話し手>ガ 終戦ノ年ニ 生マレテイタ）⫤ 1

33'. パリでは写真を撮らなかった。（極性が‘否定のフォーカス’）
前提: ？（<話し手>ガ パリデ 写真ヲ 撮ッタ）**is under discussion**
主張: ？（<話し手>ガ パリデ 写真ヲ 撮ッタ）⫤ 1

2.3 節で論じたとおり、本小論は従来述語（動詞）がフォーカスになって

いるとされてきたケースを、命題の極性がフォーカスになっているケースと述語動詞自体が構成素フォーカスになっているケースに分ける。この立場に基づいて「V-ナイ」を用いた例を観察すると、これらの例では他の文中の要素を‘否定のフォーカス’にすることができないだけでなく、述語動詞自体を（構成素フォーカスとして）‘否定のフォーカス’にすることもできないことが分かる。

例えば、次の(34)は（上の(31)、(33)と同様に）極性フォーカスの例である。一方、本小論のいう述語動詞自体が「否定フォーカス」を担っている例とは、(35)のようなものである。この例から分かるとおり、述語動詞自体（この場合「あげた」）を‘否定のフォーカス’にするためには、日本語では「～ノデハナイ」構文等を用いる必要があり、動詞の単純な否定形（V - ナイ）を用いた文は落ち着きが悪いのである。

34. Q: イワンは太郎に本をあげたのか。
    A: イワンは太郎に本をあげなかった。
35. Q: イワンは太郎に本を[あげた]$_F$のか。
    A1:??イワンは太郎に本を[あげ]$_F$なかった。[売った]$_F$んだよ。
    A2: イワンは太郎に本を[あげた]$_F$のではない。[売った]$_F$んだよ。

まとめると、述語動詞の‘否定のフォーカス’は、他の構成素要素と同じく述語動詞の否定によっては得られない。要するに、述語動詞を否定することによって得られる解釈は 2.3 節で「極性フォーカス」と仮に名づけたものに限られるのである。

日本語と同じく、ロシア語でも述語動詞を否定することによって、他の文中の要素の否定の解釈を得ることはできない。上の(32)、(33)の日本語の例に対応するロシア語の例を以下に挙げる。

36. Q: Ty sdelal eti snimki <u>v Parizhe</u>?
    you made these photos in Paris
    A1:*Ja *ne* sdelal eti snimki <u>v Parizhe</u>.
    I not made these photos in Paris
    A2: Ja sdelal eti snimki *ne* <u>v Parizhe</u>.
    I made these photos not in Paris

37. Q: Ty sdelal snimki v Parizhe?
you made photos in Paris
A: (Net.) Ja *ne* sdelal snimki v Parizhe.
no I not made photos in Paris

(36A1)から分かるように、動詞の前に否定辞を置いても、v Parizhe（「パリで」）を‘否定のフォーカス’にすることができず、(36A2)に見られるように v Parizhe の前に否定辞を置く必要がある。一方、(37A)では文が表している事態の成立のみが否定され、他の要素（例えば、「パリ」、「写真」）が‘否定のフォーカス’になっている意味では取れない。（つまり、(36A2)等の意味では取れない。）

しかし、日本語とロシア語のフォーカス表現には違いも見られる。また、上述の通り、日本語では、述語自体がフォーカスになっている場合は他の構成素フォーカスと同じように「～ノデハナイ」構文等によって表され、極性がフォーカスになっている場合は述語動詞と否定辞の結合で表されるという風に、はっきりと使い分けが行われているのに対し（(34)、(35)などを参照）、ロシア語では、どちらの場合も否定辞の ne が動詞の前に来ることになるので、イントネーションや文脈等によって区別がなされる。述語動詞自体がフォーカスになっている(38)の例と、極性がフォーカスになっている(39)を比べてみると、ロシア語では形の上で区別がないのに対して、日本語では(38)では「～ノデハナイ文」、(39)では単純述語否定文が対応していることが分かる。

38. A: Gde ty kupil svoi chasy? ／時計をどこで買ったの？
Where you bought your watch
B: Ja ih ne kupil, (mne ih podarili).
／買ったんじゃない。（もらったんだよ。）
I it not bought to_me it they_gifted
B の主張: λx(<話し手>ガ 時計ヲ x シタ) ∋ 買ウ

39. A: Ty kupil te chasy, chto hotel?／ほしかった時計を買ったの？
You bought that watch that wanted
B: Net, ja ih ne kupil. ／いや、買わなかった。
No, I it not bought

Bの主張:？(<話し手>ガ 時計ヲ カッタ) ∮ 1

以上、本節では、次のようなことが明らかになった。

- 日本語とロシア語で否定文におけるフォーカス構造はほぼ共通していること。
- 2.3節において、先行研究でただ「述語のフォーカス」として扱われることのあったものの中には、実は二通りのパターンがある（述語構成素フォーカスと極性フォーカス）という記述を行ったが、日本語の否定文においてはこうした述語が担うことができる二つのタイプのフォーカスが形式上明確に区別されていること。

3.4. 否定の“MCフォーカス”

久野(1983)は日本語の否定文中のどの要素が‘否定のフォーカス’になりうるかに関して、基本的なスコープ制限である(40)をもとに説明し、その中で「マルチプル・チョイス式[27]」情報構造をもとにしたフォーカス認可に関する例外規定を設けている。

40. **否定辞のスコープ：否定辞「ナイ」のスコープは、それが附加されている動詞、形容詞、「Xダ」に限られる。そのスコープが、上の制限を越えるのは、否定の焦点が「マルチプル・チョイス式」インフォメーション構造を持っている場合のみである。**

本節で問題にしたいのは、こうした久野(1983)において例外扱いを受けているケースである。以下の久野(1983)からの例を参照されたい。

---

[27] 適宜MC(Multiple-Choice)と略記する。‘マルチプル・チョイス式’の情報構造を有する例として、久野(1983)は例えば次のようなものを挙げている。

(i) 僕は**車で**来た。

来る方法として「歩いて／自転車で／バスで／車で」といったいくつかの選択肢が考えられる中から、「車で」を選んで発話が行われているような場面は想定しやすい。それに対し、‘穴埋め式’の情報構造にもとづく発話の例として、「シェークスピアは、1564年に生まれた。」といったものが挙げられている。シェークスピアの生年のような情報は、通常の文脈では特にいくつか選択肢の中から1564年が選ばれるというよりは、空欄を埋めるような形で与えられるものだという。

41. Q. 君は、この時計を**パリで**買ったのか。
A. ??いや、パリで（は）買わなかった。
42. Q. 君は、パリで時計を買ったのか。
A. いや、パリでは時計は買わなかった。

久野(1983)の分析によると、(41)では「コノ」の使用やかきまぜ語順（･･･コノ写真ヲ パリデ･･･）から、動詞以外の要素「パリで」が否定の焦点になっているものと考えられる一方、「コノ時計」を買った場所はどこか1ヶ所のはずで「マルチプル・チョイス式」焦点に関する例外規定にもあてはまりにくいため（前節で取り上げた(30)、(32)と同じ理由で）認容不可となるとされている。一方、(42)に関連して、「僕は時計をパリで（は）買わなかった」という文には以下の二通りの解釈の可能性があり、そのどちらの解釈においても適格文であるという。

43. 僕は時計をパリで（は）**買わ**なかった。
44. 僕は時計を**パリで（は）**買わなかった。

まず(43)は、前節で触れたように、「動詞が否定の焦点になっている」と久野(1983)がいう場合である。「パリで時計を買う」という事態の成立／不成立が問題になっている先行文脈であれば、既述の通り、本小論で「極性フォーカス」として扱われるケースにあたる。

そして、もう一つの解釈(44)は、「パリで（は）」が‘意味上の否定のフォーカス’になっている場合である。この例で動詞以外の要素（「パリで」）が否定の焦点になっているにもかかわらず認容可能なのは、「時計ヲ買ウ」場所は、お土産品用の時計を沢山買う旅行者にとっては容易に「マルチプル・チョイス式」焦点と解され、例外規定があてはまるからだという[28]。

しかし、(42)からも分かるように(44)中の「パリで」は、(i) 情報の新旧からして先行文脈に出現していた古い情報であることや、(ii) 主張の中で「パリで」が直接的には否定されているわけでないと考えられること、(iii) 対比セットの喚起（久野(1983)のいう「マルチプル・チョイス式」情報構

[28] ‘マルチプル・チョイス式’の情報構造を有する例として、久野(1983)では、他にも例えば次のようなものが挙げられている。

(i) 今日は**車で**来なかったので、歩いて帰らなければならない。
(ii). 今日は学校に**花子と一緒に**来なかった。
(iii). 僕はこの週末、あまり**一生懸命**勉強しなかった。

造）に依存して認容可能となる（本稿が‘否定のフォーカス’とみなすケースではこのような対比セットの喚起への依存はない）こともあり、本小論はこの「パリで」を‘否定のフォーカス’とみなすことはしない。

本小論では、このタイプの構文を特別扱いする必要はなく、情報構造上のフォーカス要素の前提集合への帰属／非帰属が述べられる主張部では、あくまで極性が「否定フォーカス」になっている（つまり、(43)と同様）と主張する。その上で、「パリで」は‘否定のフォーカス’ではなく対比トピックとして扱われるべきであるという見方をとっている（対比トピック（Contrastive-topic）とは新情報としてのフォーカス要素でなく談話の流れの中ですでに喚起されている旧情報要素が対比的に取り上げられたものである）。

要するに、上の久野(1983)のいう(42)の二つの解釈に当たる(43)(44)は、どちらもあくまでも同じタイプの‘否定のフォーカス’（極性フォーカス）を有するものとして、以下のように記述すべきと考える（ただし(44)のケースは(43)にはない反転極性含意を伴う。このことについては次節で論じる）。

42'. 私ハ、時計ヲパリデ（ハ）買ワナカッタ。（極性が否定フォーカス）
前提：？(<話し手>ガ パリデ 時計ヲ 買ッタ) is under discussion
主張：？(<話し手>ガ パリデ 時計ヲ 買ッタ) ∋ 1

3.5. ‘意味上の否定’の発生のメカニズム；対比トピックが生み出す反転極性含意

本節では、対比トピックが文中にあった場合に生じることのある特有の含意と、それによって対比トピックが‘意味的に否定’されるメカニズムについて説明しておきたい。

実は、上述の、「パリデ」という対比トピックを含む(44)の解釈の中でも先行文脈によって、以下で示している二通りのパターンが想定できる。

45. Q. パリでは時計を<u>買</u>いましたか？（極性フォーカス）
A. いいえ、パリでは時計を<u>買いませんでした</u>。（極性フォーカス）
46. Q. i) <u>どこ</u>で時計を買ったの？ ii) <u>パリ</u>で？
（構成素フォーカス：「パリ」）
A. いいえ、パリでは時計を<u>買いませんでした</u>。（極性フォーカス）

まず、(45A)について見てみよう。これは「パリで」が対比的でない通常のトピック要素としてとらえられる文脈であれば、極性フォーカスを持つ単なる否定応答文である。

しかし、「ハ」(や音調)によりマークされた場合(そして対比トピックの存在自体を可能とする適切な文脈(対比セット[29]が喚起される文脈)が

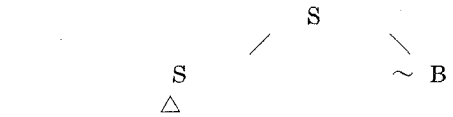
[29] 本小論の考える「対比セット」という概念と大きく重なりあいながらも異なる概念として、Rooth(1992)らの代替意味論(Alternative Semantics)の枠組みにおける、代替セット(alternative set)というものがある。このアプローチでは、フォーカスに関連した構造を扱うため、表現αの通常(ordinary)の意味価(semantic value; $[[\alpha]]^{o}$と表記; 例えば固有名については個体、文については命題)以外に、代替の意味価(alternative semantic value; $[[\alpha]]^{f}$と表記;例えば固有名については個体の集合、文については命題の集合;フォーカス要素をそれと同じタイプの代替セット alternative set 中の要素に置き換えていくことによって$[[\alpha]]^{o}$の代替としてえられる価の集合)が導入される。

そして例えば Q-A ペア(各発話をφとαとして表す)におけるフォーカス解釈が応答文において適格になされるかどうかは、フォーカス解釈オペレータ(Focus Interpretation Operator; Rooth 1992 の表示法では〜記号であらわされる)が充足を要求する、$[[\phi]]^{o} \subseteq [[\alpha]]^{f}$といった諸制約が満たされているかどうかにより、その適格性が一般的に説明される。具体的例示のため、Rooth(1992)が挙げた(i)の文のフォーカス解釈の認可過程についてみてみよう。

(i) A: $[\text{MARY}]_F$ cut Bill down to size. (=α)

(iA)(=α)の文のフォーカス解釈を説明するため、次の(iA)'の構造のように、機能的なフォーカス解釈オペレータ「〜」が付加操作により導入され、と同時に変数(B)が導入される。

(i)'A:



この変数 B は、一種の“フォーカス照応詞(focus anaphor)”とみることのできる要素であり、談話中で、$[[\alpha]]^{f}$の部分集合であり、かつ$[[\alpha]]^{o}$およびそれと異なる少なくとも一つの要素を価中に持つ先行要素(antecedent)をとることにより認可されることが、フォーカス解釈制約によって要求されている。そしてそのような要請をみたす先行要素にあたるのが、(ii)に示すように、談話(D)中で(iA)に先行すると考えられる質問文(iQ)(=φ; その通常の意味価$[[\phi]]^{o}$)である。((ii)中では S'と B との間でのフォーカス構造に関するこのような意味的照応関係が、かりに 7 という下付インデックスにより表示されている)。

(ii) Q: Who cut Bill down to size? (=φ)
A: $[\text{MARY}]_F$ cut Bill down to size. (=α)

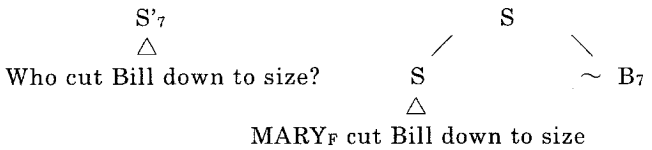
(iii)

整っている場合)に、対比トピックは次のような反転極性含意を生み出す。

47. 反転極性含意(RPI; Reversed Polarity Implication)：対比トピックに関する対比セットの要素の中に、極性を逆転させた命題を成立させるものがあるという含意（(46)の例だと「パリ以外の都市の対比セットの中に、そこで話し手が時計を買ったという命題の成立する要素がある」という含意にあたる[30]）。

この反転極性含意をふまえて、「パリで」が対比トピックと解釈された場合の(45A)のフォーカス構造を、本小論の記法により表示すると次のようになる[31]。

45'. パリで(は)時計を買いませんでした。(極性が'否定のフォーカス')
(「パリで」が対比トピック→ RPI)
前提：？(<話し手>ガ パリデ 時計ヲ 買ッタ) is under discussion



以上、簡単な Q-A ペアの例をとって代替意味論(Alternative Semantics)におけるフォーカス構造の扱いの一端を示した。またこのアプローチの説明は、ある発話（MARY cut Bill down to size.）の Topic-Focus Articulation がどのようなものかを分析するため、必ずしも実際の談話中に発話がなくとも、それに対応すると考えられる Q(question)を立てて分析をすすめる、後述の Roberts(1996)らの QUD(Question Under Discussion) アプローチとも通じる考え方である。

30 反転極性含意(RPI; Reversed Polarity Implication)のかわりに反転極性前提(RPP; Reversed Polarity Presupposition)と呼ばれることもある。対比トピックを、キャンセル可能な含意 = RPI ではなく、さらに強い前提 = RPP を生み出す要素としてとらえることについての言及は、Lee(1999)、Oshima(2002)等にみられる。

31 (45)がもつ「パリ以外のところで時計を買ったところがある」という解釈は、「パリで」を対比トピックとすることにより、「パリ」に関する対比セットが activate された結果生まれた含意として記述を行っている。同様の解釈は、(i)の応答(iA)にも見られる。

(i). Q: どこで時計を買ったの？パリで買ったの?
A: いえ、パリで買ったんじゃありません。

ただそこでは、前提と主張の組み合わせの中からそのような意味が生まれるとする分析を行っている。(45)では、とくに「別のどこかで時計を買ったところがある」という前提を必要とせず、「パリで時計を買ったか買わなかったか」だけを問題とすることができるのに対し、(i)では問題設定の中にすでに「場所 x で時計を買った」という前提が含まれているという違いがある点を、本論文の意味の表示の中で明示的に書き表しているわけである。

主張: ?(<話し手>ガ パリデ 時計ヲ 買ッタ) ⊮ 1
含意: ∃x/場所:x≠パリ (<話し手>ガ x デ 時計ヲ 買ッタ)

なお、このような文では上述の含意が生じることによって対比トピック(この場合に「パリで」)がある意味で間接的な形で否定されることになる。しかし、主張部の'否定のフォーカス'はあくまでも極性にある。(言い換えると、対比トピックとしての「パリで」が生み出す「時計を買った場所であって、パリでないところが存在する」という含意の中で、「パリで」が間接的に否定されているわけである。)

このような扱いをすることの大きな利点としては、肯定文についても、対比トピックを通して RPI が生じ得ることとの並行性が直接的にとらえられる点が挙げられる。

例えば、以下の例では「パリで(は)」が対比トピックとして解釈され、「話し手が時計を買ったパリでないところがある」といった含意が生じている(後述の(51)も参照。ただし Givon(1978)の指摘する通り、自然言語における肯定文と否定文の使用においてみられる非対称性とかかわって、日本語例文(48)で RPI の読みを出すため、単に音調的マーキングだけでなく「ハ」による形態的マーキングを必要とする度合は(45)の場合よりも高いものと思われる)。

48. Q: 君は、パリで時計を買ったの?
A: うん、(私は、時計を)パリでは買った。
(極性が'フォーカス';「パリで」が対比トピック)
前提: ?(<話し手>ガ パリデ 時計ヲ 買ッタ) is under discussion
主張: ?(<話し手>ガ パリデ 時計ヲ 買ッタ) ⊨ 1
含意: ∃x/場所:x≠パリ ¬ (<話し手>ガ x デ 時計ヲ 買ッタ)

一方、(46A)の解釈は次のようなものである[32]。先行文脈の(46Qi)では、「<話し手>が場所 x で時計を買った」ことが前提になっていて、フォーカスになっている要素は「どこ」である。しかしながらそうした文脈でいきな

[32] 前節で取り上げた、久野(1983)によって「マルチプル・チョイス式」情報構造を有するとされる(44)の解釈に関しては、久野(1983)が先行文脈に当たる質問のフォーカスについて明記していないが、「パリデ」が'意味上の否定のフォーカス'としている解釈では「時計ヲ買ッタ」ことが前提になっているという記述があることから、久野(1983)が考えているケースはここでいう(46)の解釈に当たると判断できる。

り「私はパリで（は）時計を買いませんでした」と答えるのは自然な答えではない。

ここで、構造化された QUD(Question Under Discussion)'s を用いて談話分析を行う Roberts(1996)等のアプローチを参考にする。このアプローチでは、談話のある局面が、次にどのような情報を要求しているかを、潜在的な疑問文 Q(question)の形で分析する（その際必ずしも談話中に対応する実際の発話があるとは限らない)。

そうした分析法によるなら、(46Q)では「どこで時計を買ったの？パリで？」という「場所」をフォーカスにした QUD に加え応答者はさらに、談話的に関与すると思われる Sub-QUD、つまり、潜在的に当該談話で利用可能であった「パリで時計を買う」という事態の成立を問題にした疑問文、を自ら導入していると考えられる（(46)ではこの Sub-QUD に対応する実際の発話はないが)。そして、その Sub-QUD （yes-no 疑問文）の答えとなる極性をまず「いいえ」と短く答えると同時に、質問文のフォーカスであった「パリで」を対比トピック要素とし「パリでは時計を買いませんでした」と応答していると考えられる。(こうして Sub-QUD を導入することによって、最初の発話者の質問のフォーカスと応答のフォーカス（「極性」）との間に表面的なずれが生じるわけである。）この応答のやり取りを以下のように示すことができる。

46'.Q: どこで時計を買ったの? パリで?
A: パリでは買わなかった。
前提: λx (<話し手>ガ xデ 時計ヲ 買ッタ) is under discussion
Sub-QUD: ？(<話し手>ガ パリデ 時計ヲ 買ッタ) is under discussion
主張: ？(<話し手>ガ パリデ 時計ヲ 買ッタ) ∋ 1

以上の議論をまとめると、対比トピックを通じ‘意味上の否定’に繋がるケースには二通りのパターンがある。

一つ目は、質問中のフォーカスと応答のフォーカスが直接対応しているパターンである。このケースでは、極性が問題になっていて、もし対比トピックがあれば、‘積極的な’反転極性含意が生じる。そして、それを通して対比トピックが意味的に否定される。(対比トピック＋極性フォーカス→反転極性的な含意)

もう一つは、質問中でのフォーカスと応答でのフォーカスが直接対応し

ていないタイプ（Sub-QUD を介して答えているタイプ）で、返事において対比トピックになる要素が質問のフォーカスに対応しているパターンである。

ここまでの分析はロシア語についても、適用可能である。

まず、(49)と(50)を比べてみよう。これらはどちらも同じ問いに対する答えであり（単純な yes-no 疑問文に対する否定の答えの例）、フォーカス構造という観点から考えると、フォーカスになっているのは、「買った」にあたる述語を含んで作られた命題相当の極性そのものだと考えられる（極性フォーカス）。しかし、(49)は「ケーキ」が単なるトピックとして働いている例（特に含意のない解釈の例）であるのに対して、(50)では「ケーキ」は単にトピックとして働いているだけでなく、「ケーキ」に関する対比セットの喚起（activation）をもとに、積極的に「ケーキ以外のものを買った」という含意を伴った発話となっている。

49. Q: Ty kupil tort? ／ あなたはケーキを買ったの？
    You bought cake
    A: (Net.) Ne kupil. ／ （いいえ。）買いませんでした。
    no not bought
    前提: ？(<話し手>ガ ケーキヲ 買ッタ) is under discussion
    主張: ？(<話し手>ガ ケーキヲ 買ッタ) ⊭ 1

50. Q: Ty kupil tort? ／ あなたはケーキを買ったの？
    You bought cake
    A: TORT – ne kupil. ／ ケーキは買いませんでした。
    cake not bought
    前提: ？(<話し手>ガ ケーキヲ 買ッタ) is under discussion
    主張: ？(<話し手>ガ ケーキヲ 買ッタ) ⊭ 1
    含意: ∃x:x≠ケーキ (<話し手>ガ x ヲ 買ッタ)

なお、(50) の「否定フォーカス」の例と対応する、「肯定フォーカス」の例においても、「ケーキ」が対比トピックであれば、反転極性的な含意が生じる。つまり、以下の(51Q)がケーキをただの背景要素として、それを買うことが成立したかどうか、単純に尋ねている文だとすると、それに対する答え(51A)は、単純に質問のフォーカスに yes として答えているだ

けのストレートな答えではなく、含意として記述したような、それ以外の情報も含んだ答えとなっているのである（話し手がケーキは買ったが、ケーキ以外の（買うはずだった)何かで買っていないものがあるといった含意が生じている)。

51. Q: Ty kupil tort? ／ あなたはケーキを買ったの？
A: TORT kupil. ／ ケーキは買いました。
前提: ？(<話し手>ガ ケーキヲ 買ッタ) is under discussion
主張: ？(<話し手>ガ ケーキヲ 買ッタ) ∋ 1
含意: ∃x:x≠ケーキ ¬(<話し手>ガ x ヲ 買ッタ)

なお、(これもまた日本語、ロシア語ともに共通するが)、先の(46)や以下の(52)のような Sub-QUD が介入した答え方では、結果的に対比トピックがあった場合（間接的ながらも）それが否定されるように感じられるものの、その仕組みは上の(45')、(48)、(50)のようなケースとは異なっている。仮に(52)を例にしてみると、(52Q)で、「<話し手>があるものを買った（∃x:x≠ケーキ (<話し手>ガ x ヲ 買ッタ))」ことがすでに前提とされているならば、(52A)のかわりにただ Net.／「いいえ」と短く応答しただけで、存在量化される変数 x について、それがケーキでない（x≠ケーキ）ということが推論される。それに対し先の(50)のように、もともとの質問文でただ極性がフォーカスになっているケースでは、Net.／「いいえ」と短く応答しただけでは(50A)と答えた場合の含意と同じ意味をもつことはないのである。

52. Q: Chto ty kupil? Tort? ／ あなたは何を買ったの？ ケーキ？
A: TORT ja ne kupil. ／ ケーキは買いませんでした。
前提: λx (<話し手>ガ x ヲ 買ッタ) is under discussion
Sub-QUD: ？(<話し手>ガ ケーキヲ 買ッタ) is under discussion
主張: ？(<話し手>ガ ケーキヲ 買ッタ) ∌ 1
推論・含意: ∃x:x≠ケーキ (<話し手>ガ x ヲ 買ッタ)

ロシア語の場合、両者のケースの間で次のような違いが観察される。前者(50)のような例では極性を担う述語以外の要素（主語を中心に）が省略されることが多いが、後者(52)のような例では極性についてだけ短く答えるのでなければ他の要素も全部残して発話を行う方が普通である。ロシア

語の (51)、(52)や、日本語の(45)、(46)にそれぞれ対応している以下のロシア語の例を比較されたい。

53. Q: Ty **kupil** chasy v Parizhe?
you bought watch in Paris
A: V PARIZHE – ne kupil.
in Paris not bought

54. Q: **Gde** ty kupil chasy? **V Parizhe**?
where you bought watch in Paris
A: V Parizhe ja chasy **ne kupil**.
in Paris I watch not bought

さらに、通常の旧情報要素（トピック要素や背景要素）は発音上無形になったり、あるいは有形の場合でもプロミネンスを伴わないことが多いのに対し、反転極性的な含意を伴う対比トピックになっている要素は発音上有形でプロミンスを伴いやすいのである。一方、Sub-QUD の設定を伴うような場合では、そうしたプロミネンス上の強調が必ずしも行われない。この点は日本語とロシア語に共通していると思われる。

3.6. 対比トピックの下位分類と反転極性含意の有無

先に 3.5 節で対比トピックが生み出す反転極性含意の記述について説明を行ったが、そこでは極性フォーカスの例だけがとりあげられていた((45)、(48)、(50)、(51)を参照)。ここで対比セットの存在を背後に持つ対比トピックの新たな例として以下の例を追加しておこう。

55. Q: ピアスと指輪をどこで手に入れたの？
A: (a) ピアスはパリで、(b) 指輪はロンドンでです。
55'. Q: Gde ty kupila ser'gi i kol'tso?
A: (a) Ser'gi – v Parizhe, (b) kol'tso– v Londone.

ピアスと指輪の購入場所をたずねた(55Q)の質問に対し、ピアスも指輪も同じ場所（例えばパリで）で買ったのであれば、背景情報を省略し新たなフォーカス情報だけを提示し「パリで（です）／V Parizhe.」のように応

答することができる。しかし、ピアスと指輪の購入場所が別である場合に(55A)は、対比トピック（(55A)では二つ：「ピアス」と「指輪」)）と新たなフォーカス情報（「パリ」と「ロンドン」）に関し、ペアリスト（pair-list）をつくる形での応答を行っている。

このような場合には、本小論では(55Aa)、(55Ab)に対し、対比トピック要素に関する「∃x:x≠ピアス ¬(話し手が x を パリで買った)」や、「∃x:x≠指輪 ¬(話し手が x を ロンドンで買った)」のような反転極性含意は特に生じていないという見方をとり、そのような含意の記述は行わない。

要するに、対比トピックの中でも反転極性含意を伴うものとそうでないものがあるわけだが、両者の違いはどの要素がフォーカスになっているかという点にあると考えられる：

56.（肯定フォーカス構文、否定フォーカス構文ともに）
フォーカスの対象が極性である文においてのみ、極性を逆転させた存在含意が生じ得る（(45)、(48)、(50)、(51) 等を参照）

反転極性含意を生み出すか否かに基づいて、対比トピックを２種類に下位分類することができる。すなわち、「極性フォーカスを伴う＝反転極性含意を伴う」ものと「極性フォーカスをともなわない＝反転極性含意を伴わない」ものである。しかし旧情報要素を対比的にとりたてているという点では、どちらも対比トピックであるといえる[33]。

以上、本節では、次のようなことを論じてきた。まず、先行研究における‘否定のフォーカス’の例外規定について、批判を行った。

- 久野(1983)が「マルチプル・チョイス式」情報構造に基づいて「例外的に」‘否定のフォーカス’になりうるとした要素は、フォーカスではなく対比トピックに相当するものであると指摘し、対比トピックの使用に伴う反転極性含意について説明した。また、本小論での記述によ

[33] フォーカス要素が対比性を帯び「対比的フォーカス」になっていると考えられるのは、(55A)における「パリ」と「ロンドン」といった要素であり、この場合も特に反転極性含意は生じない。またフォーカス要素に伴うことの多い「総記」の含意は、反転極性含意の一種としてみなすこともできる。例えば「あなたは何を買ったの？／Chto ty kupil?」といった文に対し「ケーキ／Tort」と答えた場合の総記の意味を、脚注７で言及したように、λx(<話し手>ガ x ヲ 買ッタ) ＝ {ケーキ}という主張として表現せず、λx(<話し手>ガ x ヲ 買ッタ) ⊃ {ケーキ}という主張と∃x:x≠ケーキ¬(<話し手>ガ x ヲ 買ッタ)という語用論的含意に分けて記述するようなケースである。

って、肯定文で生じる対比的な含意も並行的に説明できることも示した。

また対比トピックについては：

・本論文が対比トピックとして分析した要素は、否定文中に現れた場合に、先行研究では‘否定のフォーカス’の一種として扱われることがあった[34]。しかし、フォーカスを新情報として定義した場合、対比トピックは旧情報に当たるのでフォーカスとして認められない。
・否定文において対比トピックが意味的に否定されるように取れることがあるが、そうした意味が出てくるのはあくまでも含意、もしくは先行文脈との照らし合わせの推論を通してである。なお、こうした含意（＝否定極性含意）が出てくるのは、述語動詞の極性がフォーカスになっている場合のみである。

本節では、日本語・ロシア語の例を対照し、これらの記述が両言語ともに当てはまることを示した。

4. おわりに

本小論では日本語とロシア語文の例を挙げ、フォーカスに関係した諸概念の整理を行った上で、両言語のフォーカス構造について、前提・主張（および含意）を記述することにより分析を行った。本小論の主張は以下のとおりである：

● 先行研究で‘述語フォーカス’としてひとくくりにされてきたものには、述語自体が構成素としてフォーカスになっているケースと、命題の極性がフォーカスになっているケースの２種類がある。
● 日本語とロシア語はフォーカスを表す具体的な手段に違いが見られるものの、否定文におけるフォーカス構造に関しては多くの共通点が見られる。
● 「否定フォーカス」を有する構文に関しては、構造的な意味の表示を行う際に、主張中で直接的に否定されるような要素のみを‘否定のフ

[34] この点については付録(1)も参照されたい。

ォーカス’とみなし、「マルチプル・チョイス式」情報構造にもとづきフォーカス要素と久野(1983)がみなしたものは、新情報／旧情報という観点から見て、フォーカス要素ではなくトピック要素の一種（i.e. 対比トピック）とみなす必要がある。

今後の課題:

本小論で考察したのは最も基本的で単純なパターンである点を了解されたい。フォーカス構造とイントネーション、さらに複雑な統語構造等との関連について、今後さらに研究を深めていきたい。また、英語等では述語を否定することによって他の文中の要素を意味的に否定することが可能であるのに、日本語・ロシア語では不可能なのはどうしてか、その原因を追求することも今後の課題としたい。日本語とロシア語のように、さまざまな点で異なる構造を持っている言語にこうした共通性が存在することを手がかりとして、これらの現象に統一的な説明を与えることがこれからの目標である。

付録１：

先行研究において、久野(1983)と同様に、反転極性含意を伴う対比トピックが‘否定のフォーカス’として扱われることは少なくない。以下で、そうした扱い方の一例として Jackendoff(1972)からの例を挙げ、類似するロシア語の例とどう対応し、本小論で採用した枠組みでどう記述されるかを見ておきたい。まず、Jackendoff(1972)が挙げている例(1)を見てみよう。(1)は、文脈により「否定フォーカス」「肯定フォーカス」両様の解釈が可能なケースである。

1. Fred doesn't write poetry in the garden.

Jackendoff(1972)によれば、(1)については、次のような前提と主張をもつ２通りの解釈が可能であり、両者はそれぞれ Bolinger(1965)のいう”B accent”（末尾上昇調; ここでは↑記号で略記する）と”A accent”（末尾下降調; ここでは↓記号で略記する）のうちいずれの音調をとるかという違いに対応するという。

2. a. 否定が主張に含まれる場合（「否定フォーカス」）

FRED↑ doesn't write poetry in the garden. ("B accent" に対応)
前提: λ x(x writes poetry in the garden) is under discussion.
主張: λ x(x writes poetry in the garden) ∌ Fred
"It isn't Fred who writes poetry in the garden."

b. 否定が前提に含まれる場合 (「肯定フォーカス」の一種)
FRED↓ doesn't write poetry in the garden. ("A accent"と対応)
前提: λ x(x doesn't write poetry in the garden) is under discussion.
主張: λ x(x doesn't write poetry in the garden) ∋ Fred
"It is Fred who doesn't write poetry in the garden."

(2b)では否定が関係してはいるが(前提部で否定がかかわっている)、Fredが「肯定フォーカス」になっているケースであるので、これ以上触れない。

それに対して(2a)では、問題になっている人物に Fred が相当するかどうかについて、前提集合への当該フォーカス要素の帰属を否定する (∌) 形式の主張を持つものとして記述されている。仮に彼の分析が正しいとすれば、本小論の用語法でいうと、Fred が '否定のフォーカス' になっていることになる。

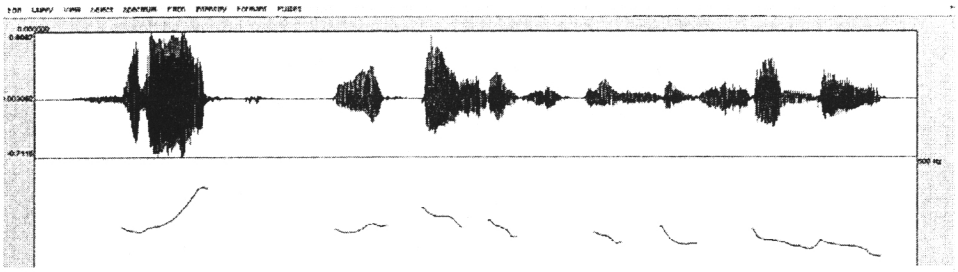
しかしながら、本小論で議論したように、(2a)は主張部分に否定を含む「否定フォーカス」の文ではあっても、主張部分で否定されるのは「Fred」ではなく、あくまでも極性であると考えられる。ただ、(2a)は、否定文における対比トピック (この場合は「Fred」) の使用により反転極性含意を伴った構造を有しており、それによって主語要素の「Fred」が否定されるように感じるのである。

次に、(2a)、(2b)と同様の文脈を想定して(3)のロシア語文を発音した場合の、二つの発話のイントネーションについてみてみよう。それぞれの発話の音声波形とピッチ曲線を下の(4a)と(4b)に掲げる[35]。

3. Fred ne pishet stihi v sadu.
Fred not write poetry in garden

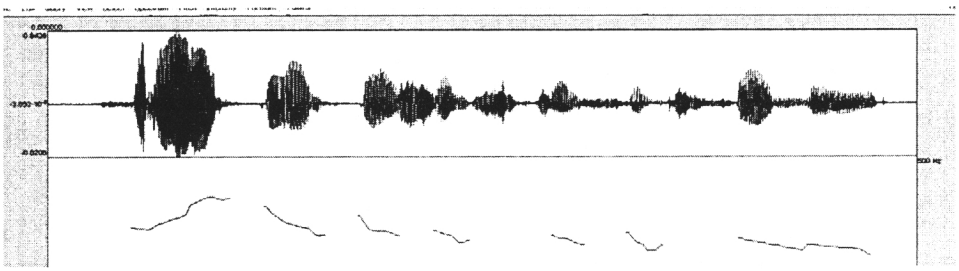
4.a. "Is it Fred who writes poetry in the garden?" という先行文脈で

[35] 音声波形とピッチ曲線の抽出は音声分析ソフト PRAAT を用いて行った。発話は筆者のものである。



Fred　　ne　pishet　s　ti　xi　vsa　du

b.“Who doesn't write poetry in the garden?” という先行文脈で



Fred　ne　pishet　s　ti　xi　vs　a　du

英語において、フォーカス構造の違いと”B accent”、”A accent”という２種の句音調の相関がみられるのと同様、(4a)(4b)のロシア語文でも Fred と結びつく句音調に違いがあり、発音をきいただけでいずれのフォーカス構造を有する応答か区別することが可能である。

Kadmon (2001) や Pierrehumbert & Beckman (1988) などの枠組みに沿ってイントネーションの記述を行えば、(2)の例に見られるような ”B-accent”と”A-accent”の違いは、フォーカス要素である Fred が本来持つ (L+)H*L という句音調指定に続いて、”B-accent”では H%のような上昇の句末境界音調指定が行われ、”A-accent”では L%のような下降の句末境界音調指定が行われるという違いとして記述される。(4a)と(4b)のロシア語発話のピッチ曲線を比べた場合にも、(4a)と(4b)の Fred に対して英語と同様の句末境界音調指定が行われているとことに注意されたい。

またこの発話ペアでは、(4a)の Fred の後ろで(4b)と比べより長いポーズが現れ、「ne pishet stixi v sadu」という句がプロソディー上、よりはっきり「Fred」と別のまとまりを形成している点も注目される。

要するに、先行研究において Fred が否定フォーカス要素となっている

とされてきた(2a)の例、そしてそれに対応する(3a)のロシア語の例はいずれも、与えられているイントネーションとプロソディー上の特徴（および文脈的特徴）からみて、極性がフォーカスになっている例と考えられ、主語があたかも‘否定のフォーカス’であるかのように解釈されるのは、本稿で論じてきた反転極性含意によるものと分析される。

なお、Jackendoff (1972) が(2a) で記述した、(1)の「否定フォーカス」構造のロシア語文例に相当しているのは否定辞 ne を Fred の直前に置いた"Ne Fred pishet stixi v sadu."のような文、つまり、否定辞を否定のフォーカスの直前に置く構文である。(3.2 節を参照。この語順の発話は肯定フォーカスの例として解釈することはできない)。

それに対して、英語では "Not Fred writes poetry in the garden."のように否定辞を否定のフォーカスの直前に置くことはできず、"It isn't Fred who who writes poetry in the garden."のような分裂文を用いてしか否定フォーカスを表すことができない。

参考文献

Bolinger, Dwight L. 1965. *Forms of English: Accent, Morpheme, Order.* Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Comrie, Bernard 1984. Russian. in Chisolm, W. S. Jr., (ed.), *Interrogativity.* pp. 7-46. Amsterdam: John Benjamins.

Comrie, Bernard 1987(/1979). Russian. in Shopen, T. (ed.), *Languages and their Status.* pp. 91-150, Philadelphia: University of Pennsylvania Press(/Cambridge, Mass.: Winthrop Publishers).

Givon, Talmy 1978. Negation in language: pragmatics, function ontology. in Cole, P. (ed.), *Syntax and semantics 9: Pragmatics.* New York: Academic Press.

Jackendoff, Ray S. 1972. *Semantic Interpretation in Generative Grammar.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

Kato, Yasuhiko 1985. *Negative Sentences in Japanese.* Sophia Linguistica XIX, Sophia University.

Kadmon, Nirit 2001. *Formal Pragmatics.* Malden, Mass.: Blackwell.

Krifka, Manfred 2001. For a structured account of questions and answers. in Féry, C. and W. Sternefeld (eds.), *Audiatur vox sapientiae. A Festschrift for Achim von Stechow.* pp. 287-319, Berlin: Akademie-Verlag.

久野暲 1978 『談話の文法』 東京: 大修館書店

久野暲 1983 『新日本文法研究』 東京: 大修館書店

Kuno, Susumu 1987. Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy. Chicago: University of Chicago Press.

Lambrecht, Knud 1994. *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents.* Cambridge: Cambridge University Press.

Lee, Chungmin 1999. Contrastive Topic: a locus of the interface. in Turner, K. (ed.) *The Semantics/Pragmatics Interface from Different Points of View 1,* pp. 317-41. London: Elsevier.

Oshima, David Y. 2002. Contrastive topic as a paradigmatic operator, handout for a paper read at *Workshop on Information Structure in Context*, Stuttgart University, pp. 13.

Pierrehumbert, Janet and Beckman, Mary 1988. *Japanese Tone Structure.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

Roberts, Craige 1996. Information structure in discourse: towards an integrated formal theory of pragmatics. in Yoon, J.-H. and Kathol, A. (eds.), *Ohio State Univ. Working Papers in Linguistics*, 49.

Rooth, Mats 1992. A theory of focus interpretation, *Natural Language Semantics*, 1(1), pp. 75-116.

高見健一 1995 『機能的構文論による日英語比較 —受身文、後置文の分析—』 くろしお出版

Takubo, Yukinori 1985. On the scope of negation and question in Japanese, in *Papers in Japanese Linguistics*, 10, pp. 87-115.

田窪行則(2005)「中国語の否定：否定のスコープと焦点」『中国語学』252, p.61-71

Van Valin, Roberd D. Jr. 1999. A typology of the interaction of focus structure and syntax. in Raxilina, E. and Testelec, J. (eds.), *Typology and the Theory of Language: From Descriptions to Explanations.* pp. 511-524. Moscow: Jazyki Russkoi Kultury Publishers.

von Stechow, Armin 1991. Current issues in the theory of focus. in von Stechow, A. and Wunderlich, D. (eds.) *Semantics. An International Handbook of Contemporary Research.* Berlin: Walter de Gruyter. pp. 804-825.

要旨

К ВОПРОСУ ОБ ИНФОРМАЦИОННОЙ СТРУКТУРЕ ОТРИЦАТЕЛЬНОГО ПРЕДЛОЖЕНИЯ

(на примере русского и японского языков)

ЕВСЕЕВА ЕЛЕНА

Предлагаемая работа посвящена сопоставительному анализу информационных структур высказывания в русском и японском языках. Статья представляет собой попытку сопоставления на примере простых предложений во многом различных по своей синтаксической организации языков (русского и японского) и выявления общих тенденций в логическом структурировании высказывания, с указанием на имеющиеся различия в конкретных способах выражения тех или иных конструкций в рассматриваемых языках на примере как утвердительных, так и отрицательных высказываний.

В частности, будут рассмотрены следующие вопросы:

・Будет показано, что в случаях, когда фокус высказывания приходится на предикативную часть предложения, необходимо выделять как минимум два разных типа информационной структуры.

・Отрицание глагольной части сказуемого не дает смыслового отрицания каких-либо других членов предложения как в русском, так и в японском языках (в отличие, например, от английского).

・Будет рассмотрен вопрос о необходимости более четкой формулировки такого термина как «фокус отрицания» и необходимости различать случаи прямого отрицания как информационного центра высказывания от тех случаев, когда смысловое отрицание получено косвенно, путем логического вывода, либо же через намеренную «импликацию», внесенную говорящим в высказывание.

(受理日　2006 年 7 月 31 日)